

令和三年度 東京純心大学 現代文化学部 こども文化学科

学校推薦型選抜試験（第一回）

【小論文】 試験問題

試験時間 90分

注意事項

- ・ 解答は、解答用紙に記入すること
- ・ 問題用紙及び下書用紙も、試験終了後回収する

受験番号

令和2年11月15日

以下の文を読み、設問に答えなさい。

(前略)

近代文明をすべて否定するのではなく、生きものとしての感覚を持てるようにするとところから転換をはかろうとするなら、生物学に大事な役割を果たせるはずと考えています。なぜなら私自身この分野で学んだがゆえに、とくに意識せずに「生きものである」という感覚を身につけることができ、日常をそれで生きていけると実感するからです。簡単な例をあげるなら、購入した食べ物が賞味期限を越えてしまったような時でも、それだけで捨てることができません。まだ食べられるかどうか、自分の鼻で、舌で、手で確認します。

鼻や舌などの「感覚」で判断するとはなんと非科学的な、そんなことで大丈夫なのか、もっと「科学的」でなければいけないのではないかと言われそうです。科学的とは多くの場合数字で表わせるということです。具体的には冷蔵庫から取り出したかまぼこに書かれた日時をさすわけです。衛生的な場所で製造されお店に出されていると信じ、安全性の目安として書かれている期限を見て、その期間に食べているわけです。それを科学的と称しているけれど、これでよいのでしょうか。こうした判断のしかたは、私には、自分で考えず科学という言葉に任せているだけに思えます。「科学への盲信」で成り立っているように思います。

もちろん、「感覚」だけではわからないことがたくさんあります。科学を通じて微生物による腐敗や毒物の生成などの危険性を知り、それに対処することは重要です。しかし、賞味期限内であれば危険はなく、それを過ぎたら危険と、数字だけできまるものではありません。科学的な知識があつたとしても、毎日の生活の中で自分で病原菌や毒物を検出し、その食べ物が危険かどうかをチェックするわけではないのですから、科学による「保証」の限界を知ることが大事です。

食べ物を自らの手で作ったり、採ったりしていた時代には、安全性については自分で責任を持つしかありませんでした。科学・科学技術のおかげでより進歩した暮らしやすい生活ができるようになり、安全が保証された形で、食べ物が手に入るようになったのはありがたいことです。でも、そこに期限をきめる数字が印刷されるようになると、それに振り回され、それに従うことが正しい、暮らし方ようになってしまいました。自分ではまったく科学に触れているわけではなく、時には科学的な考え方をするでもなく、ただ「科学が保証してくれているはず」という雰囲気

気の中で何も考えずに数字を鵜呑みにしているのです。そうではなく、生きものであることを忘れずに、その力を生かすことが必要であると思うのです。

ネズミやイヌなど他の生きものに比べたら嗅覚などはかなり感度が悪くなっているとはいえ、私たちの五感はいいセンサーです。もちろん、上手に使っていないと鈍くなるので、感度を保つためにも日常その力を生かすことは大事です。科学を知ったうえで、機械だけに頼らず生きものとしての自分の感覚をも活用するのが、私の考えている「人間は生きものである」ことを基本に置く生き方です。科学的とされる現代社会のありようは実は他人任せなので、これは「自律的な生き方」をしようという提案でもあります。

うっかり期限の過ぎたかまぼこをすぐには捨てずに鼻や舌を使うという小さなことですが、一事が万事、この感覚を生かすとかかなり生活が変わり、そういう人が増えれば社会は変わるだろうと思うのです。常に自分で考え、自身の行動に責任を持ち、自律的な暮らし方をすることが、私の考える「生きものとして生きる」ということの第一歩です。

(後略)

出典 中村桂子 著 『科学者が人間であること』 岩波新書 二〇一三年

### 設問

本文を参考に、あなたの考える「自律的な生き方」を六〇〇字〜八〇〇字で提案しなさい。その際、筆者の考える『人間は生きものである』ことを基本に置く「生き方」について、文中のキーワードを用いながら簡潔に解説し、それに対する賛否を明らかにすること。また、筆者の考えと比較したり、具体例を出したりして読み手が納得できる提案になるよう工夫すること。